

「日本式 教育法」と「ユダヤ式 天才教育法」

を題材にした “比較教育論”



工学博士 久保田修介

目 次

- 序 章 “錚々たる人材、を輩出し続けるユダヤ民族
- 第1章 ヨーロッパにおける「ひとづくり」の歴史
- 第2章 「日本の教育」は“教科書中心主義、
- 第3章 何度も提言される「教育改革論」
- 第4章 “ユダヤ人の叡智、の源泉：「タルムード」
- 第5章 「知識（Knowledge）」と「叡智（Wisdom）」の違い
- 第6章 「Learn（学ぶ）」と「Study（研究する）」の違い
- 第7章 「教え込む」と「才能を引き出す」の違い
- 第8章 まとめ

序章 “錚々たる人材” を輩出し 続ける ユダヤ民族

ユダヤ系の人間は、時代がどのように変化しようが、世界のあらゆる国々のあらゆる分野で活躍している。

まるで “綺羅星の如く”、多くの人材を次から次へと輩出し続けている。

例えば、次頁以降の人材の数々……

<ノーベル賞 受賞者の多さ>

ノーベル賞は、1901年に設けられた 国際的な賞。

「生理学・医学賞」「物理学賞」「化学賞」
「文学賞」「平和賞」、それらに加えて1969年に
「経済学賞」が設けられている。

これまでに 約800名を超える個人に贈られているが、
その 約 25 % がユダヤ系の人材である。

1905年の初受賞から 2019年までの間に、

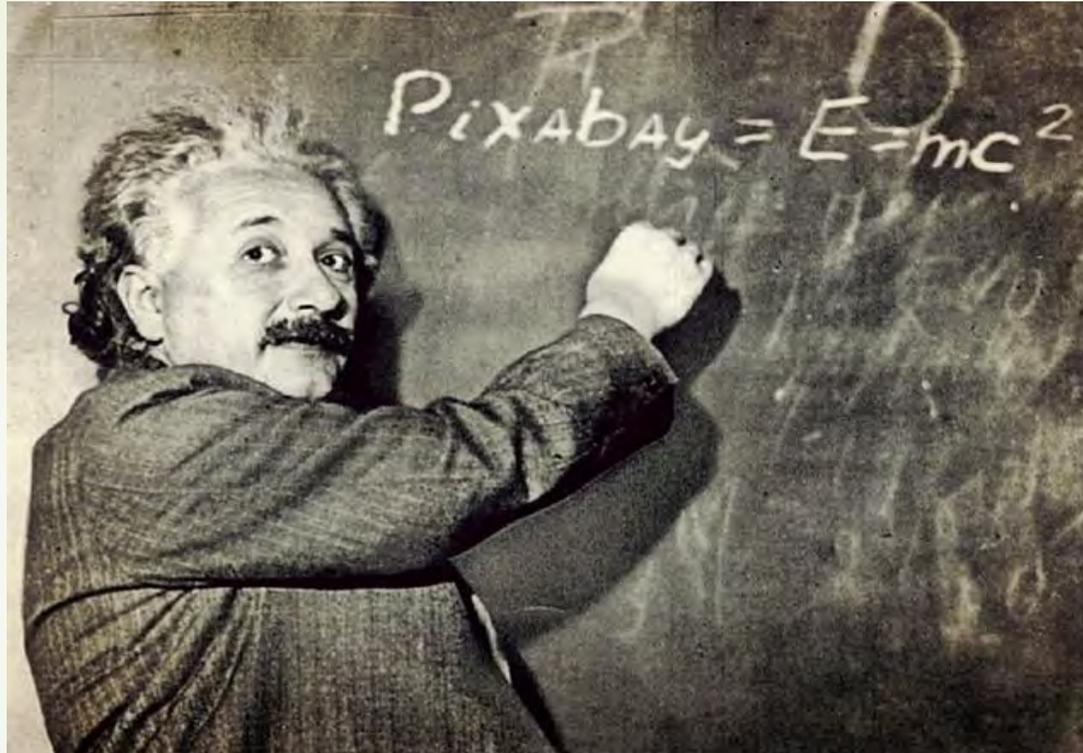
- ◎ 生理学・医学賞：53名
- ◎ 物理学賞：55名
- ◎ 化学賞：34名
- ◎ 文学賞：15名
- ◎ 平和賞：9名
- ◎ 経済学賞：29名

計195名で、6種類の賞の全てを受賞している点も特筆される。

<因みに、日本出身で外国籍の者も含めて28名、3%である>

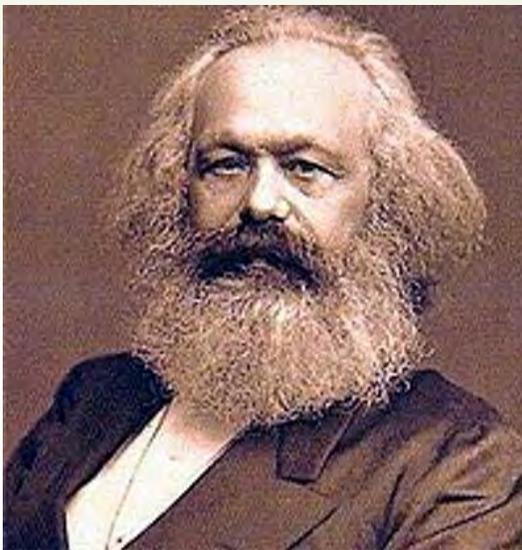
<学術 分野での著名人>

6



アルバート・アインシュタイン

$E=mc^2$ という著名な公式。「質量がエネルギーと等価である」ことを現したこの公式は、核分裂・核融合という巨大なエネルギー世界の存在を教えたものである。



カール・マルクス

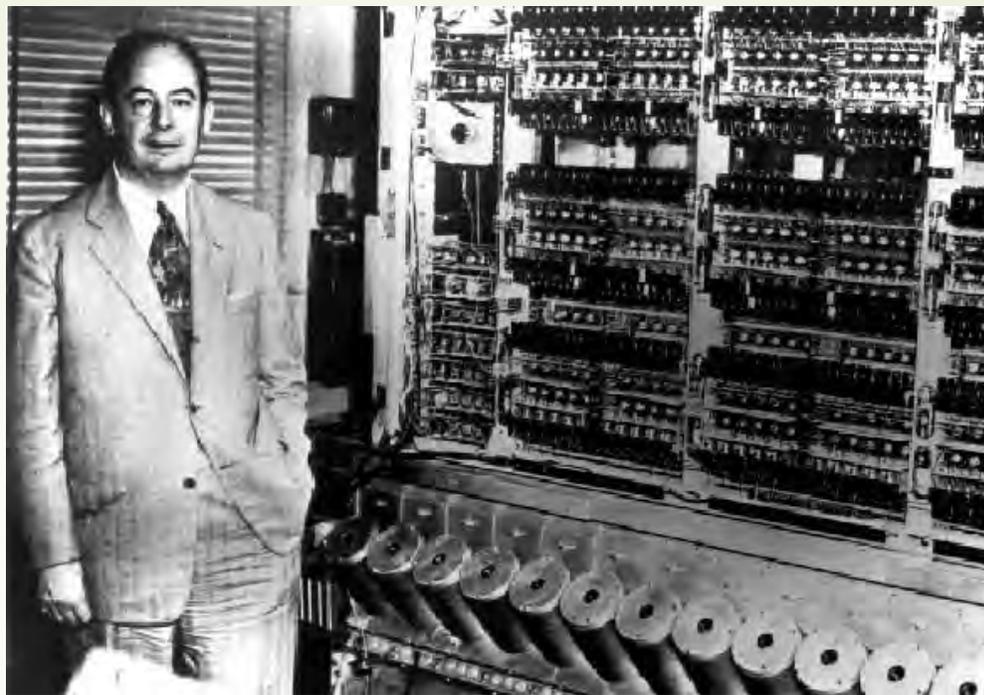
資本主義が高度に発展すると、やがて社会主義・共産主義が到来する必然性を説いた『資本論』を著述。

この学問体系は『マルクス経済学』と呼ばれ、20世紀の国際政治や思想に多大な影響を与えた。



エリック・エリクソン

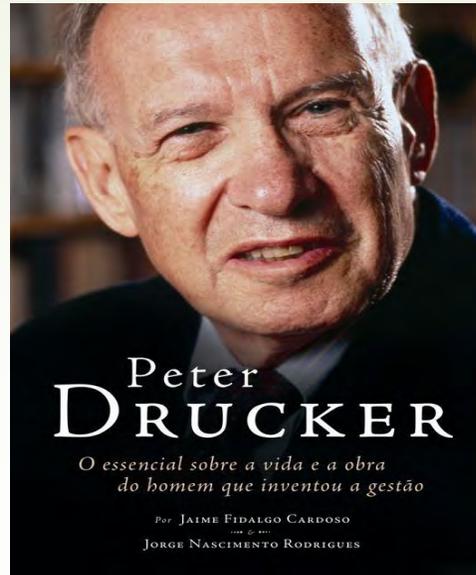
発達心理学者：「心理社会的発達理論」を構築し、幼児の心理研究から始め、青年期、成人期、老年期へと8段階に区分し、「エゴ・アイデンティティ（自我同一性）」という概念を提唱。



ジョン・フォン・ノイマン

IQ 300以上の“天才”で「ノイマン型コンピュータ」の創作者。

『経済学』に「ゲーム理論」の導入、『数値流体力学』では「人工粘性概念」の考案、『気象学』では気象予測に数値モデルとコンピュータを利用する手法の導入等々、各分野で顕著な成果を上げる。



ピーター・ドラッカー

組織を纏め上げ、人を動かすための方法である「マネジメント概念」を考案した『経営学』の権威者。

自分の「強み」を活かし、自己啓発の重要性を説き、グローバル化、IT化社会など現代社会が直面する課題とその処方箋を数10年前から指摘。



アブラハム・マズロー

「人間は自己実現に向かって絶えず成長する」とした『自己実現理論』において、人間の欲求を5段階の階層で示す。

- ◎ 自己実現の欲求 (Self-actualization)
- ◎ 承認 (尊重) の欲求 (Esteem)
- ◎ 社会的欲求 / 所属と愛の欲求 (Social needs / Love and belonging)
- ◎ 安全の欲求 (Safety needs)
- ◎ 生理的欲求 (Physiological needs)

＜金融 証券 分野での著名人・有名企業＞

現在の世界経済を牛耳っているユダヤ系財閥は、ロスチャイルド (Rothschild) 家が群を抜いた存在である。

尚、支家、分家にサッスーン (Sassoon) 家、クーン・ローブ家 (Kuhn Loeb)、モルガン (Morgan) 家がある。



ジェイコブ・ロスチャイルド
(1936～)
第4代 ロスチャイルド 男爵



ナサニエル・ロスチャイルド
(1971～)
次期 第5代ロスチャイルド 男爵

＜尚、1885年 ヴィクトリア女王から爵位を得る＞

ユダヤ系財閥が掌握する世界の中央銀行、及び主要銀行は以下のものがある。

- ◎ イングランド銀行
- ◎ ロンドン ロスチャイルド銀行
- ◎ ウェストミンスター銀行

- ◎ フランス銀行
- ◎ パリ国立銀行

- ◎ ブリュッセル ランベール銀行

- ◎ カナダ ロイヤル銀行
- ◎ モントリオール銀行
- ◎ アラブ投資銀行
- ◎ スエズ金融銀行
- ◎ 香港上海銀行 (HSBC)
- ◎ そしてアメリカの連邦準備制度理事会 (Federal Reserve Board : **FRB**) 等々である。

一方、ユダヤ系 投資銀行は、
企業が上場する際に、その株式の売買を請け
負う 取引業務だけでなく、企業のプロジェクト
投資、或いは 企業買収などの際のコンサルタント
業務も行う。

主たる企業は、次頁の通りである。

- ◎ ゴールドマン・サックス
- ◎ リーマン・ブラザーズ
- ◎ ベア・スターンズ
- ◎ ソロモン・スミス・バーニー
- ◎ ウォーバーグ・ディロン・リード

等々である。

余談ながら、ユダヤ系の人間が獲得した「中央銀行」とその“中身”は、次の通りである。

1694年、民間銀行としてのイングランド銀行を設立。その後、**“通貨発行権”**を獲得し、英国の「中央銀行」とすることに成功した。

＜日本では 将軍 徳川 綱吉の生類憐令の時代＞

即ち、民間銀行が発行する銀行券が「法定通貨」となり、これにより「中央銀行制度」が完成した。

この「仕組み」は、“紙幣の錬金術”と呼ぶにふさわしいものである。

尚「マクロ経済学」、或いは最近台頭してきた左派系の学者が唱える経済政策理論で、「現代貨幣理論：MMT（Modern Monetary Theory）」がある。

内容は、国家は借金を気にせず、ドンドン紙幣を印刷し、それを国民にばら撒くべきだという考えである。

この「仕組み」は、“紙幣の錬金術”と呼ぶにふさわしいものである。

尚「マクロ経済学」、或いは最近台頭してきた左派系の学者が唱える経済政策理論で、「現代貨幣理論：MMT（Modern Monetary Theory）」がある。

内容は、国家は借金を気にせず、ドンドン紙幣を印刷し、それを国民にばら撒くべきだという考えである。

現在の「日本銀行」で具体例を示そう。

独立行政法人 国立印刷局で刷られる紙幣は、2018年の「日本銀行券」の発行枚数は30億枚である（内訳は1万円札：12億枚、5000円札：2億3千万枚、1000円札：15億7千万枚）。

一方、日本銀行 決算書の『銀行券製造費』は、519億8576万円と記述されている。

ここから試算すると、各紙幣とも約17円になる。

仮に、物価上昇を勘案しても、せいぜい“1枚25円、前後の原価のものを1,000円、5,000円、10,000円紙幣として日本国政府や市中銀行に貸し出している。

何と 10,000円札が 10,000枚で 1億円になるが、
その原価は 約25円！

たった 25円 前後で 印刷したものが 億単位の
利益を生むことになる。

これが “紙幣の錬金術” である。

その結果、当然のことながら、日本国の “借金” は
年々 増え続け 2019年度で 実に 1100兆円強に 膨れ
上がっている < 一人当たり 約 1,000万円 >

18世紀初頭にユダヤ系の人材が考案した
“仕組み”が、時を超え、場所を超えて連綿と
現代の「日本国」でも継続されている。

これこそが「中央銀行」の本質であり、各国政府
が“借金地獄”に陥っている真の要因であろう。

正に「ユダヤ人の“叡智 (Jewish Wisdom)”」
そのものである。

<情報通信 分野での著名人・有名企業>

前述の通り、1945年頃「コンピュータの父」と称されるノイマン博士が新しい計算システムをプログラム化し、近代コンピュータのひな形を開発した。

1990年代から、ユダヤ系の人材による情報通信産業は産業革命以上に、人類の生活、社会、文化等を大きく変革させ、21世紀は「情報革命」の時代と言われている。

主たる企業は、次頁の通りである。

◎ マイクロソフト社 (Microsoft)

ビル・ゲイツ
(ドイツ系米人)



⇒ スティーヴン・バルマー ⇒ サティア・ナデラ
(ユダヤ系米人) (インド系米人)



◎ グーグル社 (Google)
ラリー・ページ &
セルゲイ・ブリン
(共にユダヤ系米人)



⇒ スンダー・ピチャイ
(インド系米人)



- ◎ デル社 (DELL)
マイケル・デル
(ユダヤ系米人)



- ◎ インテル社 (Intel)
アンドリュー・グローブ
(ユダヤ系米人)



- ◎ 旧社名 フェイスブック社 (Facebook)
新社名 メタ (Meta) 2021年10月28日に変更
マーク・ザッカーバーグ
(ユダヤ系米人)



<報道通信 分野での著名人・有名企業>

1849年 ポール・ロイター（Paul Reuter）は、イギリスでロイター通信社を設立し、全世界への通信網を構築した。



ロイターは、最初は“伝書バト”を使った情報事業をヨーロッパで行っていたが、やがて電信技術の進歩に伴って、電報通信に移行している。

その後、全世界に通信網が整備されるとともに、ユダヤ系の指導者は、媒体を通して情報や主張を流通させることで、アメリカを初め多くの人々を誘導し、世論操作することを可能にしている。

主たる企業は、次の通りである。

(通信)

- ◎ ロイター通信

(新聞)

- ◎ ニューヨーク タイムズ (NYT)
- ◎ ワシントンポスト (WP)
- ◎ ウォールストリート ジャーナル (WJ)
- ◎ ニューヨーク ポスト (NP)
- ◎ ザ・サン

(政治経済雑誌)

- ◎ タイム (TM)
- ◎ ニューズ ウィーク (NW)
- ◎ USニューズ アンド ワールド リポート
- ◎ フォーチュン

(雑誌)

- ◎ ニューハウス社の「ヴォーグ」「グラマー」

(その他)

「ピューリッツァー賞」のジョセフ・ピューリッツァー

<放送 分野での著名人・有名企業>

マスメディアは、1920年代 後半からラジオネットワークが組織されたが、この業界でもユダヤ系の人間の活躍が目覚ましい。

当初テレビ放送は、CBS と NBCが電波を支配していたが、その後 ABC と FOXが追い上げている。

主たる企業は、次の通りである。

- ◎ CBS（当初の社名は Columbia Broadcasting System）
- ◎ ABC（American Broadcasting Company）
- ◎ FOX（Fox Broadcasting Company :
映画会社「20世紀フォックス」の傘下）

＜映画産業 分野での著名人・有名企業＞

20世紀は映画の時代の始まりである。アメリカの映画産業の多くは、ユダヤ系の人間によって企業化されている。

映画は娯楽の手段であるが、もう一方に映画会社の所有者や製作者の意図、価値観を観客に伝える手段でもある。

その意味で、映画は「ユダヤ文化」を世界に宣伝し、普及することに貢献している。

主たる企業は、次の通りである。

- ◎ ユニバーサル
- ◎ 21世紀フォックス
- ◎ パラマウント
- ◎ ワーナー・ブラザーズ
- ◎ コロンビア
- ◎ メトロ・ゴールドウィン・メイヤー
- ◎ ウォルト・ディズニー



ウォルト・ディズニー



ダニエル・ラドクリフ

<その他 分野での有名企業>

(化粧品業界)

- ◎ レブロン
- ◎ ヘレナ・ルビンシュタイン
- ◎ マックス ファクター
- ◎ エスティ・ローダー

(酒類)

- ◎ シーグラム (世界最大の蒸留酒メーカー)

(食品)

- ◎ ネッスル (コーヒー)
- ◎ ユニリーバ (食品)
- ◎ コカコーラ
- ◎ ブルックボンド (紅茶)
- ◎ マクドナルド

(事務用品)

- ◎ オリベッテイ

(家電製品)

- ◎ フィリップ

(玩具)

- ◎ マテル (バービー人形が有名)

(衣服)

- ◎ リーヴァイ・ストラウス (ジーンズ)

(石油)

- ◎ シェル

第1章 ヨーロッパにおける「ひとづくり」の歴史

約2,300年もの昔に著した「第一哲学」と称される『形而上学』が後世に大きな影響を与えている。

アリストテレスの顕著な功績は『論理学』『心理学』『生物学』『倫理学』『政治学』『芸術学』等々という諸領域にわたる学問と学問体系を作り上げた点にある。

その中でも特筆されることは、最も優れた哲学書である『形而上学』によって科学技術が進歩したことである。

『形而上学』という哲学書によると、初めに物事を構成する要素ごとに、一旦バラバラに細かく分解して考察することが重要であると説いている。

その後、それらをもう一度統合させて“物事の本質、を究明する作業を行う”という科学的態度と哲学的態度にある。

アリストテレス理論に基づいて考察すると……

- ◎ 「学校」とは端的に言うところ「学問」を知る場所
- ◎ 「学問」とは「分解と統合」を行い、「仮説—検証作業」を繰り返すもの

そして、“普遍性のある真善美”を導きだすものである。

尚、この「分解と統合理論」によって、キリスト教文化圏 や イスラム教文化圏で 科学技術が振興していったと指摘することができる。

ヨーロッパにおける「ひとづくり」の根底には、アリストテレス哲学を基軸に据えて、人間が生得的に保有している「潜在能力」を いかに引き出す教育 を行うかという思想哲学が 脈々と流れ続けている。

第2章「日本の教育」は「教科書中心主義」

東京工業大学教授 川上正光の著書『日本に大学らしい大学はあるのか』において、日本の教育現場では、全てが「**紋切型教育**」であると述べている。



教師は生徒が何も知らない、何も持っていないことを前提にした教育が行われている。

時には、一方的に生徒に「知識」を詰め込むだけになるので、「日本の教育」は“教科書中心主義”であると記している。

教える側の教師は教科書中心に教え、教わる側の生徒は教科書を必死になって暗記する。

その結果.....

- ◎教科書をうまく教える教師が“いい先生”
- ◎教科書を最も詳しく暗記した生徒が“秀才”と言われることになる。

この教育の仕方は 小学校から “大学” に至るまで 全く同じで、仮に 生徒が教科書に書いてない独創性を発揮すると、たちまち 枠外にはじき飛ばされる。

そうした生徒は 学校にあきたりなくて、飛び出してしまいか、怠け者になってしまおうと指摘している。

川上正光は、これを一言でいうと、
学校は“知識の詰め込み競争”をやらせているに
すぎないと手厳しく論じている。

このようにして決められる成績は、“考え出す
能力”とは全く関係がないことが分かる。

換言すれば、日本人は教育に汚染され、本来
持っている“考えだす力”が養成されないと語る。

第3章 何度も提言される「教育改革論」

1947年（昭和22年）に『教育基本法』が公布されてから、70数年が経過しているが、その教育の中身は「教育 = 受験」という形が連綿と続いていると評しても過言ではない。

昭和50年代（1970年代）に入ると、受験戦争が一段と加熱し、学校教育が知識偏重の「詰め込み教育」になっているという批判が出てきた。

この批判に対応する形で、中央教育審議会（中教審）は「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」の中で「ゆとりと充実」という表現で、次頁のように学習内容の変更を提言した。

「我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようとして、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。

たくましく 生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。

我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を **【生きる力】** と称することとし、これらを バランスよく はぐくんでいくことが重要であると考えた」

「自ら学び、自ら考える力」とは、
論理的な思考力と批判的な思考力、判断力、表現力、
課題発見力、課題解決力を育成し、創造性を培い、
自らの良さや可能性を伸ばし、自己実現を目指す
ことである。

更に、自らを律する心、他人を思いやる心、
感動する心、健康管理や体力向上をバランスよく
目指していくことの重要性も指摘している。

しかしながら、ここで述べられている資質や能力は、企業経営者や従業員、或いは公務員や一般社会人にも求められるものである。

それをいきなり児童や生徒、或いは学生に求めても、また教える側の教師にその具体策を求めても、論理的にキチンと解答することは難しいことであろう。

2019年5月18日に、教育再生実行会議が「高校教育改革」の中で「高校普通科」を4タイプにするという“類型化された提言書”を日本国政府に提出している。

これらの関係条文や 答申書で謳われる文言を眺めていると、抽象概念といえる文言を具体化させる 実施計画案がないために、ただ美辞麗句が並ぶだけになっている。

ところで「改革」とか「変革」という文字に接すると、江戸時代末期から明治時代初期にかけて活躍した人々を思い描いてしまう。

例えば、勝海舟や福沢諭吉らである。



勝海舟や福沢諭吉らは、江戸時代に日本国が独自に製造した咸臨丸に乗船し、幾多の危険に遭遇しても、“新しい日本国の姿”を構築するために、欧米に出かけて行った。

その渡航目的は、欧米の最先端の政治、経済、文化を見分し、先進国の成功事例の収集、活用の仕方の“探索の旅”にあった。

A Group of Samurai in front of Egypt's Sphinx, 1864



「1864年、エジプト スフィンクス前の侍グループ」と記述されている。

尚 1864年（元治元年）には「蛤御門の変」が起こり、3年後の1867年（慶応3年）に「大政奉還」がなされた時代である。

尚、余談ながら この件に関して補足説明をしたい。
幕末の徳川幕府は外国に使節を 4 度派遣している。

- ◎ 1860年、咸臨丸で遣米使節
(随行員のなかに福沢諭吉がいる)
- ◎ 1861年、派欧使節団、英仏はじめ 6カ国を歴訪
(随行員のなかに福沢諭吉がいる)
- ◎ 1864年、第二次遣欧使節団歴訪
(池田筑後守らがスフィンクスの前で記念写真撮影)
- ◎ 1864年、清国への使節船派遣

写真に Beato というサインがあるが、これはベ아트兄弟の兄の Antonio Beato で、エジプトルクソールに居を構え、旅行者の記念写真を生業にしている。

弟の Felice Beato は 報道写真家で、異国を駆け歩いた。

代表作は、インドのセボイの反乱、中国のアヘン戦争、日本では関門海峡での英仏連合艦隊が下関襲撃をはじめ、日本人の生活などを撮影している。

一方、銀行制度の構築に関しては、1881年（明治14年）明治政府の大蔵卿（現財務大臣）に就任した松方正義という人物が日本国には中央銀行が必要だとして制定に取り組んでいる。



松方正義は、1877年（明治10年）に渡欧し、ロスチャイルド家の使用人であるフランス蔵相のレオン・セイと面談し、中央銀行制度に関する意見交換を行っている。

レオン・セイは、次頁に示した「4つの助言（アドバイス）」を行っている。

第1の助言：日本国が発券を独占する“中央銀行、を持つこと

第2の助言：中央銀行といっても、イングランド銀行やフランス銀行は古い伝統に支配されているので、モデルにならないこと

第3の助言：そこで、最新のベルギー国立銀行を事例として、これを精査すること

第4の助言：当時 欧米の主要国は「銀本位制」から「金本位制」に移行していたので、日本国も「金本位制」を採用すること

レオン・セイの助言に基づいて「大日本帝國 中央銀行」が提唱され、翌1882年（明治15年）6月に『日本銀行条例』が制定されて日本銀行が誕生している。

ベルギー国立銀行を参考にして、資本金は当時の金銭で1,000万円、日本国政府と民間企業が折半で出資している。

また、1885年（明治18年）、日本銀行初の紙幣が発券され「銀本位制」が導入されている。その後、1897年（明治30年）に「金本位制」に移行している。

尚、松方は、第四代内閣総理大臣に就任している。

さて、【序章】で示した通り、世界をリードする人材を数多く輩出し続けている「ユダヤ式天才教育」という具体的な成功事例があるのに、どうしてその成功要因を分析し、参考にしないのかになってくる。

「ユダヤ式天才教育」については、当然 教育再生委員会 や 中央教育審議会の “先生方” は十分 承知されていることと思うが、その具体的 実行計画の実現には至らないというのが 現実の姿であろうと慮（おもんぱか）ってしまう。

仮に、明治時代の人々なら、世界中を飛び回り「人づくり」の成功事例を探し出し、日本国の実情に沿うようにアレンジして、導入したのであると思うってしまう。

実は、マーヴィン・トケイヤー（Marvin Tokayer 1936年～）が「ユダヤ式教育」と「日本式教育」の相違を『比較教育論』の観点から具体的に記述している。



著書名は『日本には教育がない～ユダヤ式天才教育の秘密』という労作である。

ここには、何故ユダヤ系の人間が世界各国で活躍できるのかについての“教育の秘密”が明確に論述されている。

次頁以降で説明していきたい。

尚、マーヴィン・トケイヤーは、1962年 ユダヤ神学校でラビ (Rabbi) と称される 聖職者の資格を取得している。

因みに、各宗教の聖職者の呼称は、次の通りである。

- ◎ キリスト教カトリック 「神父 (英語 Father or Priest : 司祭) 」
最高位聖職者 : 教皇 (ラテン語 : Papa ・ 英語 : The pope)
- ◎ プロテスタント 「牧師 (英語 Pastor or Minister) 」
- ◎ 聖公会 「牧師 (英語 Rector or Reverend) 」
- ◎ イスラム教 「Mullah (ムッラー) or Ruhani (ルーハーニー) 」

マービン・トケイヤーは、東京都 渋谷区の 日本ユダヤ教団で勤務する傍ら、ヘブライ語が堪能な皇族の故 三笠宮崇仁 親王とも親交があった。

日本在住が長く、皇室をはじめ 皇室ゆかりの神社とも親密な間柄があるため、幅広い観点からユダヤ人と日本人との『比較文化論』や『比較教育論』を語る 知日派の論客である。

2016年、日本国の産業や文化の振興、発展に寄与した者に贈られる「旭日双光章（きょくじつそうこうしょう）」を受賞していることから伺える。

現在は、米国 ニューヨーク州に在住している。

第4章 ユダヤ人の 叡智の源泉：タルムード

先ず、「日本の教育」には、人間とは何か、人間としての「生き方」「学び方」「働き方」は何かという基本的な問題意識が欠けた教育がなされていると考えている。

つまり、

「なぜ 生きるのか — どう 生きるのか」

「なぜ 学ぶのか — どう 学ぶのか」

「なぜ 働くのか — どう 働くのか」

という根源的なことがないがしろにされていると思う。

現在の日本では、ただ有名な学校へ合格し、有名な企業に勤務し、地位を高め、或いは財産を築くということが、成功の定義になっていると感じる。

平易に言うと、「金持ち＝成功者」という拝金主義的な考え方が蔓延しているようである。

マービン・トケイヤーは、世のため 人のため、
或いは 社会に役立つ人間を育てることが “教育の
ABC” であると断言している。

続けて、彼は、日本の学校では「知識」だけを
教えており、「叡智（知恵）」は 教えていないと
語る。

ユダヤ人は「知識」と「叡智（知恵）」には
大きな違いがあることを誰でも知っている。

マービン・トケイヤーは、こういう状況の時には何をすれば良いのかを教えるのが「知識」であり、これに対して、何をして良いのかが分からない時に、どう やったら上手くいくのかという 判断力を養う のが「叡智（知恵）」であると語る。

人生に成功するためには「知識」も必要であるが、「叡智（知恵）」もそれと同じほど必要である。そして「叡智（知恵）」を教えることができるのは、学校ではなく“家庭”である。

家庭が中心になって教えなければならない。子供にとっては学校よりも、家庭の方が遥かに上であるというのが「ユダヤ式教育法」の根幹になっている。

彼は、子供には「知識」と「叡智（知恵）」とどちらの方を先に教えるべきかと聞かれれば、どの国であれ、初めに「叡智（知恵）」を教えるものであると論じている。

「知識」はあとで覚えれば良いものだが、
「叡智（知恵）」は覚えるものではなく、身に付けるものであるから、学校では教えられないと語る。

家庭で教える教材として、5,000年の昔から存在する「タルムード (Talmud)」を用いている。

ユダヤ系の人間は『旧約聖書』に示される「モーセ五書」(トーラー)とそれに次ぐ権威があるとされる「タルムード」という“口伝律法”がある。

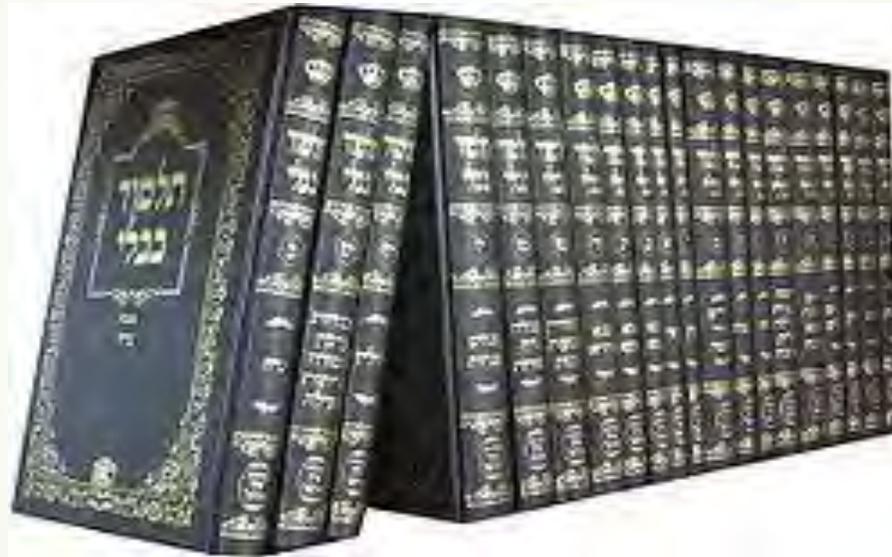
日本人には馴染みの薄い“口伝律法”なので、「タルムード」について説明を加えておきたい。

ユダヤ系の人間は、日常生活を送る場合は、『旧約聖書』よりも、寧ろ「タルムード」を基軸に据えている。

「タルムード」に基づく生活 そのものが “人生マネジメント” をうまく進める原動力になっていると言えよう。

「タルムード」を用いて「研究」「学習」する事柄は、日常生活の慣習や医学、衛生、子育て、紛争解決、家庭から恋愛、セックス、商売や金銭に至るまで、ありとあらゆる規範とそれに関する詳細な議論の全てを記してある。

400 頁にも及ぶ書物が 何と 30冊以上も揃っている世界最古で、世界最大の議論集である。



400 頁にも及ぶ書物が 何と 30冊以上も
揃っている世界最古で、世界最大の議論集である。

その研究、学習の仕方こそがユダヤ系の人間が「知識」ではなく「生きる叡智（知恵）」を育んでいくのだと考えている。

「ユダヤ式天才教育」の原点は

- ◎ 「タルムード」にある
- ◎ “家庭教育、そのもので実施されている
のである。

具体的な家庭教育の姿は、次の通りである。

ユダヤ系の母親は 子供が幼少の頃から、「タルムード」の説話を毎日 毎晩 読み聞かせている。

その説話に登場する人物の考動を 事例として取り上げ、子供たちに「あなたなら、こういう時にどうする」と質問を投げかける。

子供たちの返答に対して「なぜ そう考えたの」
「なぜ そうするの」という具合に進めていく。

何気ない日常生活の一場面であるが、この説話を通して、人生で起こる色々な出来事やトラブルに対して母親は「あなたが、こんな目に出会ったならどうする」と問いかける。

子供は どうやれば その困難を切り抜けられるかを
考えて、答えを見つけ出す。

そして「僕なら こうするよ」「私なら こんな方法
を取るわ」という具合に、状況に応じたアイディアや
工夫、発想を子供の方から出してくる。

こうしてユダヤ系の子供たちは幼少の頃から、母親が語る説話や小話の中で、自然な形で、危険な事態に遭遇したら どう脱出するかについて語り合う。

逆に、そもそも危険な事態に遭遇しない方法は何かという経営用語でいう「リスク コントロール」「リスク分散」を体得していく。

この研究、学習こそが、ユダヤ系の人間がグローバル社会で数多くの成功者を輩出する基因であると断言できる。

子供の頃から、ビジネス（事業・商売）の基盤となる「人生マネジメント」「課題発見・課題解決策」「リスクマネジメント」という概念を、様々な多角的な観点から捉える訓練を積んでいるからだと思う。

これが「ユダヤ人の『叡智 (Jewish Wisdom) 』」の源泉である。

この知的能力の高さこそが、祖国を失い、他民族の土地で生きていくために役立っている。

特に、諸民族間の通訳業務とか商業は、彼らが古代から得意とした仕事である。

とりわけ 金融に関する知識、技術は、ヨーロッパでユダヤ系の人間が 生き延びる術となり、彼らはそれを用いて社会的地位を高め、各国で政治的・経済的な影響力を振るうことになった。

次頁以降に、生活編と商売編についての題材のごく 一部を紹介したい。

<生活編>

- ◎ 最初にしなければならぬことを最初にし、
最後にしなければならぬことを最後にすること
- ◎ 健康ほど大きな宝はない
自分の興味のあること、楽しいことを仕事にすることは
健康にとって良い
- ◎ 国王は国を支配するが、賢人は国王を支配する
- ◎ 空腹のときは歌え。傷ついた時は笑え
- ◎ 運をよくしようと思えば、運のいい人と付き合え
豊かになるには、豊かな人と付き合うべし

<商売編>

- ◎ 商人は できる限り 口を閉じていよ
人々に賢いと思われるよりも、愚かだと思われるべきだ
- ◎ 何も失わず、楽をして 成功することなど あり得ない
- ◎ 良いことの次には 必ず悪いことが起きる
抜け出せるのは 準備した人だけ
- ◎ 小さな儲けにとどめよ。そして、それを繰り返せ
- ◎ いくら 矢を重ねたところで、折れるときは 折れる
だからこそ、矢は 別々に 分散させておけ！
- ◎ 商売は “仕組み (System) ” を作ったものが勝つ

第5章 「知識 (Knowledge) 」と 「叡智 (Wisdom) 」の違い

「知識」は物事について、既に世間一般にハッキリ分かっている事柄であり、英語ではナレッジ (Knowledge) と訳されている。

この「知識」には永久に変わらないものと、いつ老朽化するか分からないものがある。

例えば、昔からの「読み・書き・算盤（そろばん）」はまず変わらないが、大学で教えている種々の学説は、いつ廃れるか分からない。

学説というものは春に新芽をふいて現れるが、秋には落ち葉となって散っていく木の葉のようなものである。

これに対して、「叡智（知恵）」には次のようないろいろな意味がある。

（１）物事の道理を悟り、是非善悪をわきまえる心の働きであり、物事の筋道を判断し、前後をよく考え、計画を立て、正しく処理する能力を指す。

こういう能力のある人を「知恵者」という。

（２）才知の働き、優れた機知、工夫、やりくり、思いつきという才覚である。

(3) 単に知識を蓄積しただけのものではなく、
真実を悟り、物事の本質を理解する能力、または
知識を正しく使用できる実践的な英知を意味する。

さらに発明、発見したり、新しい知識をつくり
出したりする能力をいう。

しかしながら、上記に示した“日本語”の「知恵」という言葉は、ことのほか“軽薄”に解釈されることが多いように思える。

例えば、「浅知恵」「猿知恵」「悪知恵」という言葉に代表されるように、「思慮の浅さ」「子供だまし」「悪だくみ」等々である。

このことから、日本人は（ひょっとして騙されるかもしれないと感じる）「知恵者」の言葉よりも、（博学多才な）「知識人」の意見の方を安心して受け入れる傾向があるように感じる。

そこで「Wisdom」の解釈は、「知恵」よりも「叡智（えいち）」の方が相応しいのではないかと考えている。

現に、（令和元年10月22日）天皇陛下が「即位礼正殿（せいいでん）の儀」の最終箇所以下のように宣明（せんめい）されている。

「国民の叡智（えいち）とたゆみない努力によって、我が国が一層の発展を遂げ、国際社会の友好と平和、人類の福祉と繁栄に寄与することを切に希望いたします」

この「宣明文」について、「知識人」は「平和」という言葉が先帝よりも多く語られていたことを評価していた。

新帝は「（国際社会の友好と平和を実現させるためには）先ず日本人の叡智を結集し、不断の努力を重ねて、日本国が一層の発展を遂げることに取り組む。

その結果として、人類の福祉と繁栄に寄与していくこと」を強く望まれているように思えた。

換言すれば、“平和や繁栄”とは、自らの叡智と努力によって“獲得”するものであって、自然に訪れてくるものではない。

さて「知恵」は英語でウィズダム (Wisdom) と訳されているが、一方「知識 (Knowledge)」は世の中で既に分かっている事柄を指している。

『スタンフォード哲学辞典』 (Stanford Encyclopedia of Philosophy) によると、

「哲学とは “知恵を愛する” こと (The word “Philosophy” means “Love of Wisdom”) 」

と定義している。

つまり、

- ◎ 「知恵（叡智）」は自分の頭で考えだす能力
- ◎ 「知識」をいくら蓄積しても「知恵（叡智）」にはならない。

ちょっと “一服”、
ビートルズの名曲 『Let it be』



Paul McCartney

When I find myself in times of trouble

＜私自身がトラブルに陥った時＞

Mother Mary comes to me

＜聖母マリアが私のもとに現れて＞

Speaking words of wisdom

＜賢者の言葉を伝えてくれた＞

Let it be

＜あるがままを あるがままに受け入れなさい : Paul McCartney 談＞

Let it be, let it be, let it be, let it be

And in my hour of darkness

＜私が暗闇に 覆われた時＞

She's standing right in front of me

＜聖母マリアが 私の直ぐ傍に いてくれた＞

Speaking words of wisdom

＜賢者の言葉を 伝えてくれた＞

Let it be

＜あるがままを あるがままに受け入れなさい＞

Let it be, let it be, let it be, let it be

Whisper words of wisdom

Let it be

第6章 「Learn (学ぶ)」と 「Study (研究する)」の違い

Learn は「学ぶ、習う、教わる、稽古する、勉強する」という訳語がつけられている。

一方、Study は「研究する、調べる、調査する、学ぶ、勉強する」という意味であり、学び方の点で全く異なる内容である。

- ◎ 「Learn」は“受け身”の立場で「習う、教わる」という意味である。
- ◎ 一方、「Study」は生徒が“主体性”を持って自ら積極的に学ぶことを意味する言葉である。

アメリカでは 子供が小学校で「勉強」するのと
中学校で「勉強」するのでは 違う言葉が用いられて
いる。

小学校では「Learn」するのに対して、中学校
以上の高校、大学では「Study」するのである。

しかし、前述のように日本では小学校から高校まで「教育 = 受験」になっている点に問題がある。

日本の教育制度は充実していて、これほど教育に投ぜられる資本が多いのに、ノーベル賞受賞者の数が、ユダヤ系の人間と比べて極めて少ないのは、日本では「受け身の教育」が広まっているからだと言えよう。

しかも日本人は優れた才能に恵まれているので、仮に“正しい教育”が子供に施されれば、日本民族の力は世界を驚かすほど大きなものになると信じている。

折角 これだけのエネルギーが教育につき込まれているのに、間違った、不毛な方向に浪費されているのは勿体ないことである。

“受け身”の勉強をいくら行っても、学力が十分に身につくことはありえない。

本当の学力というのは、試験によい成績をとるのではなく、自分で“応用する力”を付けていくことである。

アメリカのユダヤ系の生徒と日本の同学年の生徒の学力を比較すると、ユダヤ系の生徒の方が遥かに実力は上回っているとのことである。

これは、ユダヤ系の生徒は自分から進んで“楽しんで勉強する”からだと言ったマーヴィン・トケイヤーは語る。

更に、日本人は事大主義であって、あらゆるものに「学」をつけてしまう。

例えば、家計簿をつけて家庭の経済を切り盛りするのは、英語では「ホーム・エコノミックス (Home Economics)」であるが、日本語になると「家政学」になる。

「ジス・イズ・ア・ペン (This is a pen)」のような初歩的な学習をしても、日本では「語学」をしているとなってしまう。

第7章 「教え込む」と「才能を引き出す」の違い

学校で生徒や学生を訓練し指導することを日本では「教育」といい、欧米では「エデュケーション (Education)」とされている。

そして、日本では「エデュケーション」を「教育」と訳しているが、これは正しいのであろうかと前述の川上正光は疑問を呈している。

そこで、私は Educate の語源を『新ラテン語辞書』（Cassell New Latin Dictionary Latin - English English - Latin : Cassell & Company Ltd.）で調べてみると、e と duca は、ラテン語でそれぞれ out と lead という意味であった。

educate とは lead forth、或いは lead out、つまり「才能を外に引き出す」という意味で、「教育」つまり「教え育む」ということではなく、むしろ 反対のことを意味していることが分かった。

日本では Education を「教育」と訳しているが、これは とんでもない大誤訳であると川上正光は語る。

Education とは、e = ex 外に、duca = lead であるから、才能を引き出すことであって、教え込む教育とは 全く反対内容である。

教育は Education ではなく、むしろ Teaching の訳語とすべきである。

それでは Education の訳語を何としたら良いかを川上正光は長年問題にしていたが、偶然「學事奨励に關する被仰出書」（明治5年8月2日太政官布告第21號）に“知を開く”という言葉があることを知り、「開知」が一番よいと考え、それを用いている。

尚、1876年（明治9年）に建築された「旧開智学校」の建物が2019年5月 国宝に指定されている。



また“開智”と命名された学校は、さいたま市の開智小学校、開智中学校、開智高等学校が存在する。

「日本の教育」は教科書に記されたことを「教え－覚える（Teaching - Learning）」という授業形式で行われている。

一方、欧米の教育は生徒自身の才能を引出し、物事の本質を考究する（Study）形式でなされている。

つまり Education - Study という授業内容である。

次の表1は「Teaching - Learning型（TL型）」と「Education - Study型（ES型）」の相違点を比較しながら、私がこれを一表に纏めたものである。

Teaching - Learning 型 と Education - Study 型の比較表

パターン	日本：TL型	欧米：ES型
志向型	知識の蓄積	創造力 開発
学校の立場	Teaching 教育 教え込む	Education 開智 才能を引き出す
生徒の立場	Learning 学習 覚える	Study 考究 掘り下げて考える
特徴	既成の枠内にいる 物知りで 模倣がうまい 問題の解き屋に 終わる	枠外に出て 自由に考える 独創力が 養える 発明・発見をする

第8章 まとめ

(1-1) 日本経済新聞の指摘

日本経済新聞が、「世界トップの教育水準を労働生産性に転換できない日本の課題」と題した特集記事を連載したことがある。

次頁のように記述している。

「かつては 画一的で 詰込み型の教育が 均質な労働力の大量供給を可能にし、日本の高度成長を支えてきた。

今でも 経済協力開発機構（OECD）加盟国中、高校世代の数学的・科学的 リテラシーで日本は首位に立つ。

だが、基礎学力の高さが 必ずしも生産性に結びついている わけではない」

続けて、「戦後、現代の教育システムは出来上がった。

それから約70年。教育改革はあまりにスローだ。このままで世の中の変化のスピードについていけるのだろうか」と締めくくっている。

(1-2) 日本経済新聞の指摘

また、『「博士」生かせぬ日本企業 取得者10年で16%減 世界競争 出遅れも』というタイトルで、一面トップ記事で紹介している。

以下のような内容である。

「主な国では 過去10年で 博士号の取得者が急増したのと対照的に、日本は一割以上減った。

専門性よりも 人柄を重視する雇用慣行を維持したままでは、世界の人材獲得競争に 取り残されかねない」 (中略)

「グーグルなど IT大手に先端分野の技術者として入社するには、修士・博士号が求められ、彼らが民間企業の成長の 牽引車になっている」

「米国では博士の4割が企業で働き、イノベーションの原動力となっている。高度人材の育成と確保は、国家の競争力も左右する」と報じ、博士号取得者が減るのは日本だけで、米国や中国は勿論のこと、韓国にも大幅に後れを取っている。

そして、「グローバルの人材評価基準から日本市場は隔絶されている」と語っている。

(2) マーヴィン・トケイヤーの指摘

戦後の日本人は 民族の誇りと 価値を失う教育を受けており、加えて 受け身の勉強である “詰め込み教育” を受けているだけになっている。

これでは、とても グローバル社会で活躍する「グローバル人材」を育成することは 難しい。

また、日本の伝統、文化を尊重し、誇りを持つ教育が 実施されなければならないと論じている。

明治時代は 西洋列強の優れた事項を学び、列強に追いつけ 追い越せを「国是」にし、他国の成功事例を学び、時には 模倣すらしてきた。

ところが 最近の日本は 他国での成功事例を把握しているにも関わらず、それらを 自国に導入しない傾向が 余りにも 強くなっている。

他国の 成功事例 導入の “仕組みづくり” を
どのように行うかが「ものづくり」の点においても
「ひとづくり」の点においても 大きな課題になって
こよう。

(3) 川上正光の指摘

川上正光の論旨は 核心をついた教育改革論であるが、これが記述されてから 既に 30 数年も 経過しているにも関わらず、教育改革が 進捗しているとはとても思えない。

環境の激変に伴い、産業界は「グローバル人材」の育成を希求しているものの、その要望に応える具体的な教育手法が見つからないのが実情であろう。

日本経済新聞と上記二人の学者が指摘する事項は、正に“国家戦略”としての重要な案件である。

この解決策は、これまで行政が実施してきた手間暇かけて“美辞麗句”を並べた具体策のない答申書を作成する作業だけでは、到底グローバル社会の変化のスピードに追いつけないだろう。

例えば、数多くの成功事例のある「ユダヤ式天才教育」の秘密を探る 実態調査の視察団を派遣し、明治時代の先人たちが実施したように、成功事例の導入策を検討するのが一番 “手っ取り早い解決策、” になるだろう。

導入策は、民間企業が実施するやり方であるが、いきなり全国の公立学校へ採り入れるのではなく、先ず、何校かの実験校を設ける。

その後、アリストテレスが指摘する「仮説—検証作業」を繰り返し、“日本式 天才教育システム (仕組み)” を構築するのが望ましいと愚考している。

日本の どの大学においても「グローバル人材」を次々に 誕生させる 画期的な教育が実施されているという事例に 接したことがないのは 誠に残念である。

この「ひとづくりの停滞」が、「ものづくり」の面における画期的な新技術開発や新製品開発、更には、労働生産性の向上の面で、日本が欧米企業を始め、アジアの新興国企業に追い上げられ、また追い抜かれている要因になっていると考えている。

この「国際競争力」について、スイスにある2つの研究機関が毎年報告書を発刊している。

世界的に有名な「競争力 国別ランキング」は、次の2つの機関が毎年発表している。

(1) ダボス会議で有名な『世界経済フォーラム』(WEF) による 国際競争力ランキング「Global Competitiveness Report (世界競争力レポート)」

(2) スイスの『国際経営開発研究所 (IMD)』による「IMD World Competitiveness Ranking (IMD世界競争力ランキング)」

『世界経済フォーラム（WEF）』の国際競争力ランキングは、次の12の主要分野

①社会制度 ②インフラ ③ICTの採用・普及

④マクロ経済の安定性 ⑤健康 ⑥スキル

⑦商品市場 ⑧労働市場 ⑨金融システム

⑩市場規模 ⑪ビジネス活力 ⑫技術革新力に

おける98項目を各種経済指標、及び企業トップへのアンケート調査によって評価し、スコアを算出して、ランキング付けをしている。

一方、『国際経営開発研究所（IMD）』では、235の指標を用いて集計している。

指標の71%は雇用統計や貿易統計という公式定量データを基にしており、残り29%は公式統計では把握しにくい「マネジメント慣行」「腐敗」「適応性」「アジリティ」等の内容をIMDが実施する経営幹部意見調査「Executive Opinion Survey」の結果をもとに算出している。

2つの調査機関による結果では、日本国に対して、次の通り、かなり辛辣に指摘している。

『世界経済フォーラム（WEF）』は、日本に対して、「学校教育の長さでは世界屈指なのに、不十分な教育方法で技能の格差を拡大させている」と指摘。

思考能力の低い教育に留まっていること、労働市場の柔軟性の低さ、女性の労働参加の少なさなども低評価につながっていると課題を挙げている。

『国際経営開発研究所（IMD）』の評価は、次の通りである。

日本の項目別ランキングは「経済パフォーマンス」「政府効率」「ビジネス効率」「インフラ」面における評価点が低い。

特に「政府効率」と「ビジネス効率」が大きく足を引っ張っており、「ビジネス効率」は、過去5年間で25位から46位と大きく順位を下げている。

更に 細部を見ると、

- * 「マネジメント慣行」が63カ国中60位
- * 「生産性効率」も56位と深刻な状況
- * 「政府系金融と物価」も59位と極めて低い
- * 「企業の競争力」にとって非常に必要な「姿勢&価値」でも51位で非常に悪い

結論として、日本の凋落が止まらないと厳しい指摘をしている。

振り返ってみると、1990年代の初めの頃の日本は、世界一の競争力を誇っていた。

しかし、年々“右肩下がり”となり、アジア諸国に追いつかれ 追い抜かれ、“地盤沈下”の数値が、次頁のように示されている。

2019年の世界競争ランキング総合順位 (カッコ内は前年)	
1 (3)	シンガポール
2 (2)	香港
3 (1)	米国
4 (5)	スイス
5 (7)	アラブ首長国連邦 (UAE)
6 (4)	オランダ
7 (12)	アイルランド
8 (6)	デンマーク
9 (9)	スウェーデン
10 (14)	カタール
...	
14 (13)	中国
28 (27)	韓国
30 (25)	日本
32 (43)	インドネシア

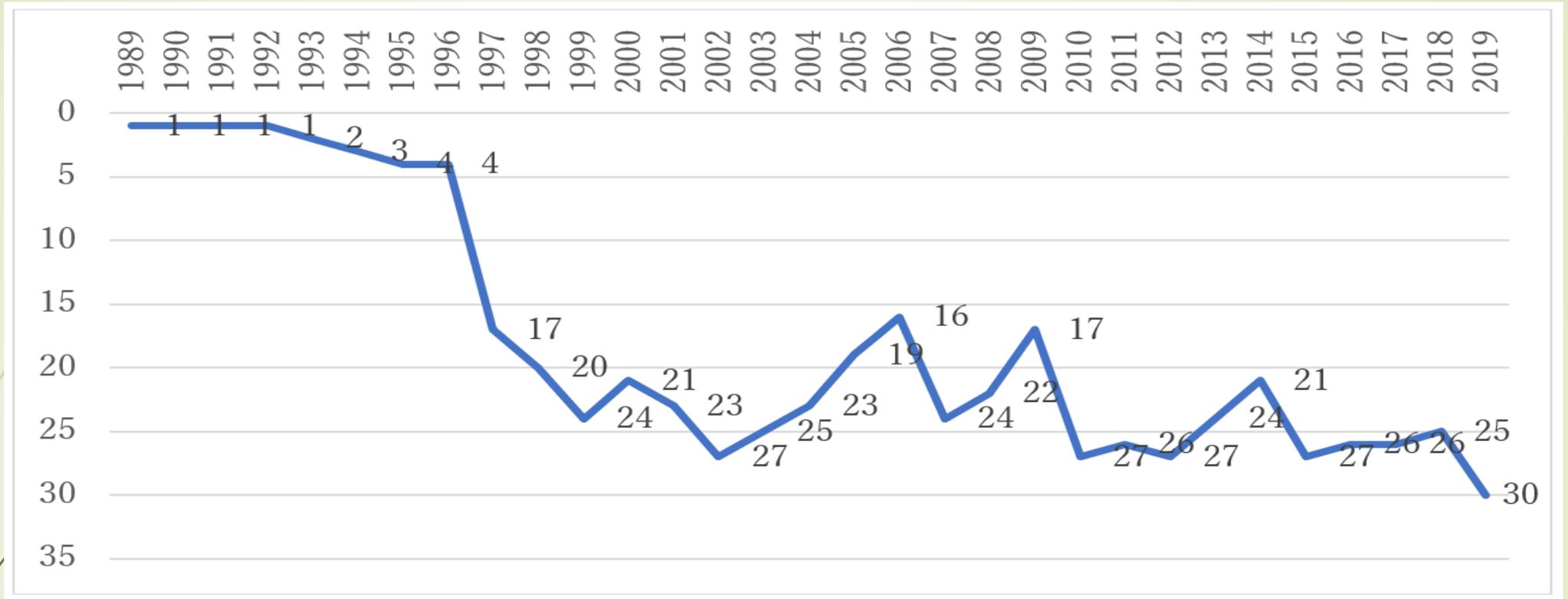


2020年国際競争ランキング			
順位	国名	順位	国名
1 (1)	シンガポール	20 (14)	中国
2 (8)	デンマーク	23 (28)	韓国
3 (4)	スイス	27 (22)	マレーシア
4 (6)	オランダ	29 (25)	タイ
5 (2)	香港	34 (30)	日本
10 (3)	米国	40 (32)	インドネシア
11 (16)	台湾	43 (43)	インド
18 (18)	オーストラリア	45 (46)	フィリピン

※6位以下はアジアを中心に抜粋、カッコ内は前年順位

出所：IMD

中国 や 韓国にも抜かれ、東南アジア諸国にも
追い抜かれているのが “現実の姿” である。



日本の総合順位は 1989年から1993年まで1位を維持し、1997年迄は5位以内の高い順位であった。

しかし、2020年の最新版によると、日本の総合順位は2019年の30位から “何と34位” にまで大きく後退している。

かつての日本には“企業戦士”が活躍していた。

文字通り 24時間 臨戦態勢の“モーレツ社員”が組織内に溢れていた。

企業間競争があり、社員間競争があり、熾烈（しれつ）な競争戦略が日本を席卷していた。

ところが、最近の学校教育では、小中学校では徒競争においても、学校の成績においても優良可を付けず、「競争は悪である」となっている。

聞くところによると、「競争 = いじめ」という考えから、多くの組織は“仲良し集団”となり、全員が“いい子”になっているように感じる。

IMD は、日本国に対して、グローバル経験や起業家精神が最下位であるので、

① 働き方改革

② 人材開発

をより一層進める必要があると指摘している。

昔からの言葉だが、“足の引っ張り合い”ではなく、お互いが切磋琢磨して励むという「競争があって進歩がある」のではなからうか。

【最後の提言】

ユダヤ系の人間の人口は、2010年の調査によると、全世界に 約1,360万人であると推定されている。

- ◎ イスラエルに 570万人
- ◎ アメリカに 530万人

これら2国のユダヤ系の人間が、全世界のユダヤ系の人間の約81%を占めている。

- ◎ フランスに 48万人
- ◎ カナダに 38万人
- ◎ イギリスに 29万人
- ◎ ロシアに21万人
- ◎ その他 地域に 125万人
とされる。

国連による 2019年の推定全人類は 77億人として
いるが、ユダヤ系の人間は 全人類の人口 77億人の
たった 0.17% 弱を占めるに過ぎない。だが、彼らは
現代社会において 際立った存在感を示している。

例えば、前述の通り、金融、証券、保険、情報、
報道、放送、映画、食料品、日用品 から 軍需用品、
化学製品まで、多くの産業を ユダヤ系の人材が
“手中に” 収めていると言っても 過言ではない。

この「成功要因」は、これまで 縷々 述べてきた「タルムード」に基づいた「人づくり」にある。

例えば、

「国王は 国を支配するが、賢人は 国王を支配する」

「商売は “仕組み (System) ” を作ったものが勝つ」

これらの教えを “叡智・知恵 (Wisdom) ” を絞って、具現化していったことにある。

現代の日本人は、向後 100年先、200年先のひ孫、玄孫（やしやご）、来孫（らいそん）、昆孫（こんそん）、仍孫（じょうそん）、雲孫（うんそん）という子々孫々に至るまでの“贈り物”を準備しておくことだと考えている。

それは、“日本式 天才教育システム（仕組み）”を構築することであろう。

昔から、次のような言葉がある。

- ◎ 花づくりは 1年先を見
- ◎ 木づくりは 10年先を見
- ◎ 人づくりは 100年先を見る

現状のまま 無為に 時間だけが過ぎ去ると、日本は確実に “衰退の道” を歩み始めることになる。

つまり、日本国が 極々 “平々凡々たる国” に落ちぶれてしまうことを危惧している。

“平々凡々たる国”であるなら まだしも、次の地図を見て頂きたい。

中国は 2050年迄に 朝鮮半島も 日本列島も 中国に“組み込む”ことを戦略目標にしているとか。

これを防ぐためにも、

“人づくり”が生き残りのための喫緊の重要課題であろう。



これがオリジナルの「国家戦略マップ」とのこと



太平洋を“2分割”して、ハワイから東の海域をアメリカ、西の海域を中国が管理しようと言いだした 2008年 頃の話。



1995年 中国 李鵬首相（当時）の発言
「日本などという国は 20年後には 消えてなくなる」
＜テレビ番組「TVタックル」（テレビ朝日系）＞

日本が他国より突出していた もろもろの技術は、随分追いつかれ、追い抜かれている。

日本国に残されている 最大の資産、無限の資源は“人材”である。

“優れた人材”を如何に数多く輩出させるかが今を生きる我々の責務であると 考えている。

ご清聴

ありがとう

ございました！